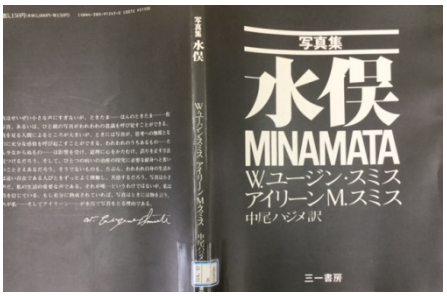
汚れなき宝子たち（1）

この 5 月 1 日は水俣病「公式確認」から 60 年。原田正純『水俣病は終わっていない』岩波新書、1985 年 2 月を再読した。先生は 1972 年 11 月に同じ岩波新書で『水俣病』を出版している。それから、十余年、悲しいことだが、私はこの本を再び「水俣病は終わっていない」で終わらなければならない、と締めくくる。

本書から学ぶことはじつに多い。Ⅵ章 環境としての子宮「汚れなき宝子たち」から、二人の胎児性患者について紹介したい。先生も述べているが、本当に心が痛む。

胎児性患者、上村智子ちゃんは昭和 52 年 12 月 5 日、20 歳の短い生涯を終った。お母さんの良子さんの口ぐせは「この子は宝子ですばい」であった。その理由はいくつかあるが、一つは「この子が私の水銀を全部吸いとってくれたので、私は何とか元気で、そのあと 6 人の元気な子供たちを生むことができた」ということで、智子がみんなの健康を保障したのだという。もう一つは、このような障害をもった姉をみて暮した下の子供たちが母に頼らず、それぞれお互いに助けあい、自立して生き、障害者に対するやさしさをもったことだという。「智子のために、母親の手伝いも何もして、みんながおりこうに、やさしく、助けあい育ってくれた」と母親は目を細めていう。確かに、この妹たちはやさしく、たくましい。



胎内で母親の水銀を吸いとったことも現在の医学では事実であり、子供たちが生と死の間にさまよう姉からさまざまなことを学びとったことも、事実であった。

さらに、智子の存在は全世界に対する一つの警告でもあった。世界中に出版されたユージン・スミスの『水俣』という写真集の中で、風呂に入れる母親の目はやさしく、その痛々しさはみる人の心を打つ。「1956 年生れの上村智子は外見は元気な母親の子宮のなかで水銀に冒された。／彼女が外界を知覚するのかどうかはだれもわからない。／智子はかわいがられ、無視されることはない。／家族のものは、生きとし生けるものは生きつづけねばならないのを知っている。」とユージンはその写真に記した。世界中の人がそれを見て人類の未来について多くのことを学んだ。

（2016年5月9日）